

---

# アポクリファスの古戦場：灰の大地/白き大樹

pandi剛種

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アポクリファスの古戦場：灰の大地／白き大樹

### 【Nコード】

N4389Z

### 【作者名】

pand i 剛種

### 【あらすじ】

「ここはなに？現実？それともゲーム？」

今話題のVRMMOジャンルをpand iちゃんが襲撃ッ。ログイン画面を押せばいつの間にかそこはまるで異世界。触る木々は確かに実感できて風は冷たくおしっこが出そう。そんな現実のようなそうでないような、そんな世界に投げ出された少女の、ラスボスめがけて大前進が今始まる！

「戦え      戦え      争い

を告げ、その向こうに血を流せ」

「うっさい！熊が喋るんじゃないわよクソが！」

序章：悲しき少女の叫び（棒読み）（前書き）

というわけでアポクリファスちゃん出番よお。

「まじかよ……」

というわけで今日から少しずつ書いていきます、夜中だけど。よろ  
しこ（\*、\*）

## 序章：悲しき少女の叫び（棒読み）

子供の時、父と母が列車事故で死んだ。

五歳の時だったと思う。

一人っ子だった私は、当然父と母と一緒にあの列車にいたはずだった。

だけど死んだのは父と母だけだった。

父は私の上におぶさってくれていた。

母はずっと私の手を握りしめていてくれた。

なんでだろう。

なんで、私は生きているのだろう。

そう考える暇もなく、時は過ぎていき、程なく私は六歳の時に別の老夫婦に預けられる事になった。

やったねレナちゃん家族が増えるよ。

と言った具合だったのだが、今度はそのおじいさんとおばあさんが死亡。

死因？

餅を喉に詰まらせて、病院送り。

そのままニツコリと笑ってあの世に行きましたとさ。

いやいや。

いやいやいや。

おかしいでしょ。

なんで笑って逝けるの？

モチ詰まらせて頭回ってなかったでしょ。

何？脳内物質でも回ってるわけ、老人がアへ顔晒して文字通りぽっくりと絶頂しちゃったわけ？

バカにしてる？

いやいや、だっておじいちゃんの最後、シートにテントはって  
んん　　そうじゃないわね、そうじゃないの。

私が言いたいことはそういう事じゃないの。

なんで私の周りで親しい人達が死んでいくの？

ああ、可哀想な

んん。おじいちゃんは、そんなに……親しくなかった……かな？

うつん、親しかった。

ここ断定しておくわ。でないと独白が続かない気がするもの。  
おかげで学校では、私は死神扱い。

「死ぬぜえ、私を見た奴は皆死ぬぜえ」

「キヤアアアア、レナちゃん格好いいいいいい」

「おら、男子どもジュース買いに行きな。でないと死ぬぜえ」

「キヤアアアアア！」

うつん、死神扱い。

OMだつてこなせるレベルよ。

そんなわけで　そんなわけでっ、私の心は幼いながら、とても  
……とても歪んでしまった。

可哀想な私。

例えるなら、渦を描いて天に向かってそそり立つ　この如き  
　　じれよう。

うぬ、立派な聖帝十字陵であるな。

そんなセリフが聞けちゃうレベルの擦じれよう。

哀しい。

私は哀しい。

「オーウ！ナンチューコト！スッゴイカワイソ！」

え？

え？

うつん、何も聞こえない。

聞こえないわ、何にも聞こえないの。

私のログには何もないわ。

そんな私がMMOに入り浸って何が悪いというの？

学校行け？

クラブ入れ？

お友達と仲良く帰って帰りに喫茶店でも寄って周りの女の子とキヤツキヤウフフしようよ？

何それ怖いわぁ。

彼氏？

彼女申請のメールの方が多い現状でそれはないわぁ。

気持ち悪いわぁ。

ナイスエクストラスリムバディ中学生美少女が街中歩いているって言うのに、誰も声掛けないもの。

「この野郎！ 私のパン取りやがってよぉ、こいつは滅茶許せんよなぁああああああ！」

こっちが声掛けたら。

「逃げんなくそ虫すりつぶしてやらぁああぁ！」

逃げちゃうんだものっ。男子ってよくわかんないわっ

そんなわけで、学校にもそんなに居場所はなく。

いやあるんですよ。

ただそれが『守護神』『番長』『そなたこそ真の三国無双よ』とか言われる立場ばかり。

私を、私を女の子として扱ってください。

私を女の子として扱ってくれる空間をください。

私を女の子にしてくださいッ。

「いやあんた女の子　　じゃないかもね」  
クソが。

くそつたれな流れ星に願いを込めつつ、四度目の老いた家族の一員として、炊事洗濯家事親父といった具合一通りのことをこなす。そして夜な夜なテレホマンが登場しそんな時間帯で、MMOをこ

なす。

私が女の子でいられる時間はここだけ。  
今だけ私は女の子なのっ。

『お前ネカマだろキメエ。レスタに呼ばれたので移動しますね^^;』

クソが。

今日も今日とて私は居場所を探す。

私が女の子で居られる場所。

私がお姫様でいられる場所。

あ、ニコ生とかうちのシマではノーカンなんで。

そんなわけで、今日も私はMMO『探し』に全力を尽くしている所だ。

正直MMO自体はそんなに経歴があるわけではないのだが、それでもいつか自分の大切な居場所を見つかけられると信じてる。

信じて

「ん？」

『アポクリファス戦記』

大したネーミングじゃない。

だけど心は惹かれた。

まるで魂がグイッとディスプレイに引っ張られていくような、ログイン画面を見ているだけそんな感覚になった。

ログイン画面には、二つの首を持った巨大な灰色の熊が見える。

広がる大陸。

砂漠、森、山、海。

青空、そして太陽っ。

ありふれている、だけど見れば見る程画像とは思えないほどに、生き生きとしているようだった。

面白そう。

心が小躍りする（阿波おどりです）  
行こう。



ここなら私の、私だけの居場所が見つけれられるかもしれない。  
私が女の子でいられる場所が。

「いやさすがに無理やろ」

うつさい流れ星は喋んなクソが。

そんな事を考えつつ私、ナイスバディの中学生、速比売レナはその『アポクリファス戦記』にログインすることにした。

これが、私の、人生で最初で最後の

「え？」

VRMMOになるとも知らず。

アポクリファスの古戦場：灰の大

地／白き大樹

森の中で私は全裸（前書き）

着工口は他の何よりも勝る宝



それで偶然面白いネットゲームを見つけて。

意識を吸い込まれて、気が付いたらここにいて。

「そっか。これ夢か」

うん夢だ（今モザイク掛け終えました。今後ともよろしく（\*、\*））

夢にしてはなんやすすんごいリアルですけど、正直それはアレです、正夢という奴だと思っています。

足元の草がはだして歩くたびにチクチクして激しく痒いけど、これ夢ですわ。

痒いだけ。

痛くないの。

多分向こうの私はあまりのむず痒さにベッドの上で〇〇をボリボリしてるところだと思うの。

うん、試しに額を近くの木にぶつけてみよう。

「ハア……フンス！」

折れた。

ゴゴゴゴゴゴッ

私のおんぼろ家ぐらいありそうなぶつとい幹が根元から折れて、地響きと土煙を上げながらゆっくりと倒れていく。

ドオオオオッ

ギアアギアアッ

枝葉が地面をドラムのように打ちたたき森の獣がその騒がしさに、泣き喚き、私も泣きそうになる。

すんげえ頭痛い。

プクツて額膨れてる。

膨れてるだけ。

何？

私の額には鉄板が仕組まれてるの？

リアクティブ装甲の？

額に鉄板？

どんな設定よ！今時奇抜すぎてさすがにお腹いっぱいな素麺ライダーでもそんな改造設定できたためしがないわよ！

何これ？

何これええええ！？

『ようこそいらつしやいました』

「ひぎやあああああああああああああああああああ！」

『ここは戦神アポクリファスが女神オル力と戦いし聖地。アポクリファスの古戦場でございますお客様』

「さらつと後ろから出てくんな蛆虫があああああああああああ  
あ！」

泣きそうになりながら身体を折れた巨木の幹の裏に隠しながら、私は恐る恐る声の主を目で追った。

う、浮いてる……。

お、おっぱいが浮いている。

女の人が森の中、ふわふわと私を見下ろし、ちよつと胸元の開いた服がひらひらと舞っている。

おっぱいもプルンプルン風に漂っている。

一向に垂れる気配がない、だと……？

どういう事なの？

これが巨乳を極めし者の業だとも言うの？

誰か教えてよおおおおおおおおお！

いや……プルンプルン？

あれ……つくりも

「本当にお越しくださり光栄でございますお客様。ですが残念なことにここは戦神アポクリファスの魔力により、魔物が跋扈する地となっております。」

お客様には、大変申し訳なく思いますねっ」

あれ？

怒ってる？

もしかして心の声が聞こえる？

おいそこのおっぱい。

やっぱり貴方のソレってつくり

「いい加減にせんとすり潰すぞ穀潰しが」

「はあい。レナちゃんいい子いい子しまあすっ」

「ここ『アポクリファス戦記』では、お客様にリアル感を追及していただくために、特別にログイン画面をクリックしていただくと、お客様の魂を自動で抜き取る作業を行わせていただきました。

これで魂は、この世界に封印され、いつまでもこのゲームを楽しんでいただけますよっ」

「さすがにいい子でけへんわあああああああああああ！」

「無料ですっ」

「うすらやかましいわあああああああああ！」

「ですが、身体はそれほど立派なものを提供できず、お客様のその貧相な身体をベースにコピーを作成することに相成りました」

「何さらつとバカにしてるのぉ！？温厚な私もぶちぎれんぞこらあああ！」

「黙って人の話聞けやクソ虫が」

「……」

正座。

お口ちゃつく。

これが私の今の全て。

長いものには巻かれるのが私の通り。  
くっそ。

絶対アレつくり

「ですがご安心ください。そんな貧相極まりない身体を守るために各ユーザーには初期装備としてあるものが手渡されることになってます」

「はあ……」

「正直貴方みたいなキュツキュツキュと花瓶を拭く音が聞こえそうな体格の持ち主に渡すのは心底嫌なのですが」

「うわあ、心の抉れる音がする」

「ですがこれも規則、仕方ないですが、渡しますので取りに来てく  
ださいね」

「なんでそんなに渡すのがいやなの？」

「だってあなた下の毛にティッシュ」

「取りに来ますのもうやめて死んでしまいます」（モザイク準備  
中）

私は言われるままに、その宙に浮くマジカルおっぱいの下に身体  
の局部を隠しながらそろそろそと近寄った。

「隠すものあるんですか？」

「初回の紹介アナウンスがなんでそんな失礼極まりないんですかあ  
！？」

「これも『アポクリファス戦記』の魅力ですよ」

「ユーザー離れますがなあ！」

そう言いながら、私は両手を差し出す（あ、モザイク置いてきた）  
手にしたのは、大きな黒光りして太くて、腕なんかすっぽり入り  
そうな空洞がある、何か大きなものだった。

テラテラと表面が光ってる。

綺麗……（モザイク拾ってきたよ！よよよ！）

先端は手の指の形をしているみたいで、これが腕にはめるものだ  
ってすぐに私はわかった。

で、早速つけてみるとあら不思議。

「おお、かつちり嵌まるじゃんっ」

そう言っただけで木漏れ日は先へし折ってもうないので日差しに照ら  
してみれば格好いいガントレットが私の手に装備されている。

と、黒いガントレットの表面が紅く光り始めて、紅い線が表面に  
まっすぐ走る。

それは手の甲に浮かぶ紋章まで走る

「あ、それ貴方の『命』です」

「……ヒットポイントって事？」

「くわしい事はその固定装備、B・A・S・Eシステムにお尋ねください。じゃ私これで」

え？

「もう帰らないと。月9のドラマが始まりますしおすし」

え？

いや、何それ？

私もっと大切なものもらってないんだけど。

ていうかこういうゲームって普通は、普通はあるはずの装備というか防具というか。

「服、貰ってないんですけど」

「野猿が服着るとか、おかしい事いいよる」

「やかましいわあ！さっさと服くださいよおお！」

「それは装備です。私はそのようなものを渡すようには言われていませんので。自分で調達して、自分で戦ってくださいね。」

あ、この世界死んだらそれまでですので。覚えなくていいけど」

「ええええええええええ！それすごい重要だね、なんで最後に言ったの？なんでそれ最後にさらっと流したのおおおお！？」

「あ、もうすぐドラマ始まるわあ。んじゃばいちゃ」

「古っ！ 感性が昭和並みの掛け声を今聞いたわあ！」

と、そんな事を言っていたら、フワフワ（それにせも　　）おっぱいのお姉さんが空へと昇り始めていく。

「ま、待って！待ってよせめて死んでもいいから服ちょうだい、服くださいよおおお！」

「この世界は呪われてしまいました。アポクリファスは、怒り狂い世界を滅ぼさんしています。」

どうか勇者よ、私が与えた力と共に世界を救ってください」

「何中途半端にプロローグ喋ってるのよ！ていうか今日日最近の勇者だって防具装備してなくても服着てるわよ！」

「お願いします。どうか世界を　　この世界に安らぎを……！」

「何なのこの待遇！？お願いだから服くださいよ、何でもしますか





なら簡単。

全部ぶっ飛ばして前に進むだけ。

嫌いなものも苦手なものも好きなものも全部ぶっ飛ばして、出口を、答えを探しに行けばいい。

深呼吸して……心落ち着かせて、それから深呼吸してからの

……！

「ヨガファイア！」

こうして、私の異世界冒険が今始まった。

帰る日はいつになるだろう。

そんなもん、帰れる日になったわかるし、今は進むだけ。

さあ、行こうっ。

青空の下全裸の美少女がケツ丸出しで、ノシノシと草むらを踏みしめる。

最高のシチュエーションだと思った。

## 森の中で私は全裸（後書き）

あ、これR - 15指定つけるの忘れてた（＊、＊）ちょっとだけ暴走してますが、お楽しみいただければ幸いです

追記：つけた（＊、＊）

## 記録其零：異界転生録・序

お師匠の話では、約3000人近い人達が拉致されたらしい。

『アポクリファス戦記』

架空のオンラインゲーム。

あるはずの無いものを触って、この日本にいる一億万人の人々の内約3000人が異世界へと連れて行かれた。

魂だけ。

向こうで、異世界のパワーバランスに適合する形でコピー体は作ってあるだろうから、本体は必要ないはずだ。

だけど拉致されたと言った通り、身体もない。

皆、煙のように消えていった。

恐ろしい力だ。

だけどそれ以上に恐ろしいのは、それだけ人々を巻き込んでも、何かを為そうとしているという事。

深い憎悪。

世界中の人間を呪うとする、恨み。

おそらく……何人死のうが、構わないのだろう。

必ず、事を成し遂げようと

『アポクリファス戦記』……アポクリファス。

争いを告げる

「……アポクリファス。君は……」

ここは速比売レナの家の前。

僕は、同級生の彼女の両親に呼ばれるままに、彼女の家に来てきたのだった。

理由は大したことじゃない。

今回の依頼は簡単だったし、駆けだし探偵の僕にとってはそれほど

ど苦労はしないと思ったからだ。

何より

「レナちゃん……どうして……どうしてどこにもいないの……？」

「帰ってきておくれ……わしら何でもするから……お願いじゃから」

「レナちゃんが笑ってくれないと……ワシら生きている意味がないんじゃ」

「お願いじゃ……帰ってきておくれ」

泣いている年のいったご両親の涙ながらの話を聞いた時、どうしようもなく胸を締め付けられた。

助けよう。

困った人々に笑顔を取り戻せるのなら、僕の拙い呪術、使うに安いものだ。

お師匠も、大婆様も快諾してくれた。

「こつちです……レナちゃんのお部屋は」

「レナ……ワシらがイヤになったのか？ワシらが……いかんかったのか？」

彼女の部屋に導かれるままに、僕は彼女の小奇麗な部屋を見渡して、驚きに目を見開いた。

整ったベッド。

本棚は綺麗にまとめられている。

机はノートパソコンがあり、傍には既に終えた数学と英語の宿題。部屋は毎日掃除しているのか埃なんて目に入らなかった。

とても、とても綺麗な部屋

学校では中々に荒くれ者で、教師でも手のつけられない彼女だが、家では本当に優しい少女だったようだ。

その上、隠れて勉強でも常に上位につける優等生。

勉強も出来て、スポーツは万能。

本当にすごい女の子だと、僕は思う。

ただ、その性格はちよつと捻くれているのだが。

「……」

私は少し、部屋の空気を吸い込む。

彼女の足取りを匂いで追う

(……そこか)

僅かな匂いを追いかけて僕の目に入ったのは、少女の机の上にある小奇麗なノートパソコンだった。

匂いは、画面の奥へと続いている。

その向こうに、『異界』が広がっている。

未だにノートパソコンは、電源を切られ充電コードを抜かれても、延々と画面に明りをつけ続ける。

そこが異世界の入り口だと知らせるように

「水樹君。そのトレンチコート重いだろう。少し脱いでおくかい？」

「……。おじいさん、おばあさん」

「ん……なんだい水樹君……？」

「今から、レナさんを助けに行きます」

「ほんと……ほんとかい？レナは助かるのかい？」

「必ず」

「レナ……レナちゃん……！」

その場おばあさんは泣き崩れる。

僕はそんなおばあさんに小さく会釈をすると、再び明りのついたノートパソコンの前、彼女の勉強机に向き合った。

彼女を助けるために必要なもの。

まずは彼女の身体。

そして彼女の魂。

その為には、約3000人の身体が安置されている場所を見つけなければならぬだろう。

それはおそらく、アポクリファスが持っている。

(……そして、魂)

この異世界で、彼女はどこで何をしているのか。  
行こう。

「……展開せよ、召喚の六茫星。現世と異界を繋ぐ柱となれ」

アポクリファス……そこまでして君はオル力を……。

足元に浮かぶ白い印字。

それは星の様な形となって床全体に広がり、やがて壁を伝い、天井まで這い上がっていく。

ドクン……ドクン……

まるで生き物のように、空間が鼓動を始める。

そして、文様が明滅を始める。

部屋全体が『異界』となる

「……おばあさん。部屋から出てください」

「は、はい……」

擦じれ始めていく部屋の景色。

明滅する紋章の浮かんだ部屋の隅に座っていたおばあさんは、戸惑いながら部屋を後にしようとする。

「……あの、水樹君」

「はい？」

振り返れば、そこには開いたドアの向こうで戸惑いがちに話しかける速比売さんのおばあさんがいた。

「……レナちゃんはね……本当は優しい子なの……引き取られた先で次々と里親がなくなられて引き取る人たちもいなくなつて自暴自棄になつて。

それでも私たちに尽くしてくれて、笑顔をくれて、頑張ってくれて」

「……」

「お願い……何でもするから……レナちゃんを、助けて……私たちの大切な娘なの」

「必ず、絶対に助けますよ」

「……ありがとう、水樹君」

閉じる彼女の部屋の扉。

密室が完成すると共に、『異界』の扉も徐々にだが、開き始めていく。

フワリ……

足元から噴き上がる冷たい風。

部屋に浮かんた光の文様の向こうから、この世界とはまるで違う世界の匂いを、風が運んでくる。

この先に、彼女がいる

（……お師匠。大婆様。崩天の呪術師、水樹幸一。人助けに行ってくださいっ）

心の中でそう呟き、僕は床を蹴った。

お師匠がくれたトレンチコートが噴き上がる風に煽られ、身体が僅かに宙に浮いて、重力に引っ張られる。

スルリ……

抵抗なく光の中に沈んでいく足先。

まるで床がなくなっただかのように、脚から胴体、そして顔まで身体全体が白い文様へと吸い込まれる。

視界が白く染まっていく。

（アポクリファス……速比売レナさん……）

その光の中に、僕は灰色の大地を眼下に見下ろす



記録其零：異界転生録・序（後書き）

何者？って思う人はノクターンに入ってる『闇の奥の奥に』を読んでね（\*´、\*）漢pand iとの約束？でもちっちゃい子は読んじやだめだぞっ、ちっちゃい子とワンコ（力強い雄に限る、雌？そらもう滅却よ）はおじさんはいいい子いい子しちやおうか（ノ、瓜、（ヾ）

獣の眼光：効果／行動値を二つ増やします

「いたっ……くそっ、血が出た」

ぶつくさぶつくさそんな事言いながら、可哀想な私は森の中をトボトボと歩いている。

歩けば棒にあたるとは言わんが、所々に木の枝が飛び出たりして、その度にふくらはぎや太ももや　にあたったりするんだ。

もう傷だらけ

太ももや　なんてもう十字傷がいくつも入って、これで私も死神から日村豚芯ね。

声優も咳さんから真四さんに変わって私も一本満足（フウフウッ！）

いやでもアレよね。

咳さん声はどう考えても十四歳の設定じゃなくて教師向け

「……教師、か」

そう言えば、ここに入る以前も大概生傷の絶えない生き方してきたなあ。

まあ教師なんて腐るほどなぎ倒してきたけど。

宿題を、忘れた、だと？

許しなさい。それで鼻の骨だけで済ましてあげる。

貴様あ……それが教頭に向かっての物言いと言つかあ！

私の方がお前より偉い人間だって言ってるのよ、このバーコード。

許さん！やれ国語の花村先生！

笑止！うぬに浴びせる拳は持たぬわ、貴様など…… 1  
ぐああああああ！

脚の一本で、十分だ。

うーん、この教師陣。

正直うちの中学校は、周りの教師よりも生徒の方が強い、というより化け物が多かったわよねえ。

というか、中学生かどうかとも怪しい人達が多かったけど。

ほお、学校一強い俺と……戦うと？

御託は要らん、さっさと掛かって来んか。それとも腰が引けたかちんくしゃ？

後悔するぞ？

させてやるって言うてんだよ間抜け、負けたらそのン切り落として部屋に飾ってやるよ。

ぬかしおる……行くぞおおおおお！

はあああああああああああ！

強かったなあ、あのゴリラ。

あれ絶対中学生じゃなくて、どつか別の宇宙人よね。

まあ宣言通りに女の子になったわけだけど。

まあそんな事を考えても仕方ない。

だってここは学校じゃないもの。どんなルールが適用され、どんな事態が起きるか正直予想ができないわ。

何が出てくるのやら

「……あ、そう言えば」

あの偽物おっぱいがくれたガントレット。まだいじってなかったわ。

っていつかあのおっぱい絶対偽物よね。

それもシリコンとか、そんなレベルじゃなくてもはや水よ水。水風船を詰め込んでおっぱいもまれた時に「おっぱいビームッ！」「ぎゃああああ！母乳が口にいいいいい！」「母乳プレイなんて変態プレイを求めるからよバカが、それは母乳ではなくて特殊溶液、これを飲んだ相手の精子を牛乳に変えて、ン の長さを五センチ縮める。これでお前はおしまいよ！」「く、クソおおお！覚えてろよ偽物おっぱいがあああああ！」「悪は滅びた」(完)

……………。

なんだっけ。

そうそう、なんとかシステムって言ってたわね。

PDAみたいなものかしらね。

私はそんな事を考えながら、適当なところで足を止めて紅く線の入った黒いガントレットを覗きこんだ。

「あれ……………」

紅い線が少しだけ縮んでる。

これは『命』、あの偽物おっぱいはそう言ってた。

てことは、私の生命力が減ってる？

……………木の幹の根元に腰掛けながら、足元を見下ろせば、柔肌に浮かぶ小さな切り傷がいくつもあった。

でも痛みはそれほどないし、多分それは大したことじゃ

(……………。そっか、その為のHP制なのね)

痛みは与えず、感じさせず、その代わり自身の生命力を『ゲージ』として振り替えておく。

おかげでプレイヤーは死ぬまで死をあまり感じることなく闘い続ける。

バーサーカー。

他者を顧みず、事故も顧みず、ただ闘い続ける人。

前にゲーセンで死体蹴りを何度も受けてさすがに切れたんだけど、そのプレイヤーが言った事を思い出す。

(いいじゃん、あんた蹴ってるわけじゃないし)

そう言う事じゃない。

他者を思わなければ、自分のことを顧みれるわけがない。  
逆もしかり。

他者を顧みるのは、他者が痛むと知っているから。

自分が痛みを覚えることを知っているから。

おそらく、この世界のプレイヤーは、殆どの人がりアル感を追求しながら、相手を顧みない人達が多いかもしれない。

おそらく、その先にあるのが

(……PK……あり得るわね)

実利を求めて、或いは快楽を求めてのどちらかは知らないけど、確実に人が敵になる可能性は孕んでいる。

まずい。

装備はおろか服すら持っていない状況で、PC相手に戦える自信は正直ない。

さっきの怪力だって、本物かどうかも怪しい。

使えるものは

「うーん……どうすれば？」

『マスター・レナ　　マスター・レナ』

「……喋るんだ」

私小学生じゃないけど、なんだかおかし気分。

とりあえず、ガントレットから聞こえてくる新しい友達の声に、

私は耳を傾けつつ尋ねた。

「あなた、誰かしら？」

『はいマスター・レナ。私はB・A・S・Eシステムです』

「略称？」

『戦闘の補助、および、物体索敵、および代謝促進を主な目的としています。他に様々な機能があります。』

機能の詳細をお聞きになりますか？』

「はいを押します」

『サンキューレナ』

「いきなり馴れ馴れしいわね……まあいいけど」

『まずは戦闘の補助から説明させていただきます。この世界、アポクリファスの古戦場では貴方はまずクラスを選択いただけます。』

貴方の世界で言うなら、職業ですね。

つまりあなたは今、無職です』

「え？」

『無職です』

「いや……二回も言わんでも」

『む・しょ・く！です』

「……生きててすんません」

『構いませんよ。この穀潰しをいやでも生かし続けるのが私のお仕事ですから』

「あのおっぱいといいなんなんこの待遇……？」

『現在あなたは無職です』

「もういいよ……心が砕けちゃう」

『その為この森、アトラの森からは出られません。森の外には魔物が設置されておりましてたいへん危険ですので。』

逆を言えばこの森にはモンスターはいません。プレイヤーもいません』

「つまり一人？」

『あなたのようなひきこもりにはお似合いですねっ』

「……外そ」

そう言って私は黒光りするガントレットを外そうして。

外れない。

『あの偽物おっぱいから説明を受けませんでした？これはあなたの命』です』

「あ、あれやっぱ偽物なんだ……」

『そらそうよ　　というわけで、貴方の生命は既にこのガントレットが全て吸収してます。』

無理に外せば、あなたは死にます』

「それ呪いのガントレットやないですかあああああ！」

『やあ、僕はマツシュ。僕と一緒に冒険をしよう』

「やかましいわ顎オ！」

『このガントレットはクリアするまで外れません』

「逆に考えるの……逆にね」

『クリアしなけりゃいいじゃん』（いいじゃん）

「違いますううう！クリアすれば外れるからいいじゃんって考え

るのおおおお！」

『はい、というわけで死ぬまで私と付き合っていたいただきます、マスタ―・レナ』

「死ぬこと前提で話さんといてえ！」

こ、こんなクソオペ子とクリアするまで共にしなきゃいけないの……？

まじで？

じ、人格矯正システムとかないの？

ないのおおおお！？

『ほら泣いてないで。早く説明始めますよ？』

「うっ……もうやだあ……」

『早くしないとヤバイですよ』

「なんでよ……」

『いわゆるスクリプト沸きって言う奴です』

「はあ……？」

『この戦闘説明を始めてから一定時間たつと』

カサカサッ

『この森に数体敵が湧きます』

「先に言えやごらああああああああああ！」

確かにヤバイ。

気配が近い。

しかも近づいてきている。

明らかに足音もこっちを向いているし、こっちに気づいている。

こっちを見ている。

私は慌てて口を塞ぐと、すぐさま立ちあがって地面を蹴り上げると出来る限り太い木を選んで、身を隠した。

そして、木の幹の影から草むらの敵意の源を覗きこむ

「ヒヒヒッ 親ぶうん、今見ましたあ？」

「ああ。あそこの影だな」

「中々貧相な女でしたが、いやあ若くてペロペロしがいのありそう

な女でしたなあ」

「お前、またペロペロすんの？あの後ギトギトになって触りづらいと言っか……」

「やかましい！女をペロペロせずしていつペロペロするんだよ！」

「……。いや普通に飴とか？」

「うーんこのメンバー最悪や」

そこには全身が茶色い毛に包まれた、他のゲームじゃ獣人と呼ばれそうな人達が四人程いた。

全員服を着ている。

アレを奪えば　　ん？

あの顔……。

あの顔、もしかして……！

わ、わ………！

「ワンコおおおおおおおおおおおおおおお！」

「ヒッ！？」

「ワンコおおおおおおおおお！」

ドオオオオッ

（僭越ながら、ここから先は私が朗読させていただきます、よろし

こ（\*、\*）

「ワンコ、ワンコ！ワンコおお！ホオオオオオオオッ！アタタタタタタタッ」

（そう言って女は、自分が身を隠していた木の幹を、拳一本、まるで流星が降るが如き回数と速さで打ち抜いた）

（ええっと、その力に耐えられる物は何もなく　　文字通り煙と

なって木屑が舞い、木の幹に大穴があいた。

（四人のコボルトは、その突然の獣の如き奇声と巨木に空いた大穴に目を剥いた）

（その大穴の向こうに、探していた　　であろう裸の女が立っていた）

（否）



（両腕をだらしなく垂らし前かがみに立ちつくす、その紅い目をした人影は、『魔物』であった）

「ワンコお……ワンコおoooooooおooooお！」

（……怖すぎわるえない）

（えと……口から煙を吐き、四つん這いになり、女は巨木に空いた大穴を這い、巨木の前にやってくる。

妙に早い足取りで、四人のコボルトの前へと歩み寄ろうとする）

（ニヤニヤと笑いながら近づくその目は、獣の目だった）

（四人のコボルトは確信する）

（　　殺される　　）

「に、逃げる、できるだけ遠くへ！早く　　」

（そう言った親分格へと獣の長い両腕が伸びていき　　最初に掴まったのは彼であった）

「ぎゃあああああああああああああああ！」

「お、おやびいいいいいいん！」

「　　ふふつ……逃がさない……！」

（逃げていく三人のコボルト達）

（そう言つて化け物は親分格のコボルトの首根っこをひつつかむと、あるうことかその親分を持ったまま走ったではないか）

ドンドンドンドンドント

（一歩一歩に爆弾がさく裂したかのような足音を立て、女は三人のコボルトを追いかけて、近づいていく）

（ブンブンブンツと片腕を大きく振る音が、森の暗闇の中近づく）

（爆音の如き足音がどんどんと気をすり抜けながら近づいてくる）

（振り向いてはいけない）

（早く遠くへ逃げなければ、早く遠くへ　　）

「　　捕まえた　　」

「ぎゃあああああああああああ！」

（悲鳴が遠のいていく）

（一人が捕まった。残りは二人）

ドンドンドンドンドンドンドンッ

（再び遠く、巨木連なる森の闇の深みから聞こえてくる激しい足音。ズルズルと何かを引きずりながら走ってくる）

（だがさすがに二人を捕まえたままなのか、速度は遅くなり足音は徐々に遠のく）

（撒いたか）

（やったか……）

「お、親分……子分も」

「ていうか俺ら名前もないし……」

「モブですしおすし……」

（そう呟きながら、遠のく獣の気配に残った二人のコボルトは互いに互いを賛美しあった）

（そして、森の奥へと逃げか隠れようとする）

「みいつけたああああああ！」

（頭上を覆う、影）

「ひひひひひひ！」

「ワンコおおおおおおおおおおお！」

（全裸の女が頭上の木の枝を伝い、両手を広げている）

（風を切り飛び降りてくる）

（その目は、暗闇の中にあって、真っ赤に輝いていた）

（まさに、獣であった）

「ワンコおおおおおおおおおおお！」

『ぎゃああああああああああああああああああああ！』

（二つの悲鳴が折り重なって、森の闇に響いた）

（朗読終了。ご静聴、ありがとうございました）

（引き続き、ゴリラ女の暴走特急、お楽しみくださいね（\*´、

＊））



獣の眼光：効果／行動値を二つ増やします（後書き）

予想外に早くうpできて僕満足（＊、＊）でも誤字も多いし、  
なにより暴走してるから気をつけて読んでね。この小説は瘴気が充  
満していますから

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4389z/>

---

アポクリファスの古戦場：灰の大地/白き大樹

2011年12月16日19時48分発行